

假名に現はれたる時代音

大島 正健

我古書に散見せる字音の假名を擧げて列記し、其原音を以て押韻したるが如く思はるゝ、彼國の詩歌賦頌に徴し、其時代を推測するは、趣味多き研究の問題なり。

第一、意^オ己^ヨ己^ゴ期^キ基^キ之^シ志^シ止^ト苦^ク耐^ノ乃^ノ能^ノ里^リ苦^ク倍^バの類。

右は先秦音のオイより出でたる聲を寫したるものにして、能く漢魏音の韻法に叶ふ。

張衡東京賦、躬三推於天田、修帝籍之千畝、供禘郊之粢、盛必致思乎勤己。畝は久の聲に従ふ、久はコ^ノの音に用ゐられたる例あり（木村正辭氏萬葉集字音辨證）故に畝のホは古音なり。

久も畝も後に至り、此類を脱して他の韻に移る。畝のホと己のコとは、兩字の押韻を説明す。

同思玄賦、廻思竭來從玄謀、獲我所求夫何思。謀の古音はモなり。思の古音は之。の類と同じくンなり。謀と思との押韻は此音に當るべし。

假名に現はれたる時代音

馬融、長笛賦、富喜異怪押韻。富の古音ホ〔萬葉集〕喜は會意の字なり、コと讀むべし、異はヨなり、其上聲の已はヨ、其入聲の翼はヨクなり。怪は會意の字にして其原音詳かならず、或はコなるべし。

曹植、孔廟頌、志誠記、志識押韻。志はソ、誠は會意の字なり、コと讀むべし。記はコ、識はシヨなり。

右の無尾韻に對する有尾韻の字を、略音として下の如く用ゐられたる例あり。應、凝、曾、登、朋、弘等なり。

上記の如く我假名にてオの聲に寫したる者は、純粹のオにては非ざりし故、其中より挨、戒、該、礙、導、代、耐、珮、背、倍、陪、每、梅等の音轉出し、本籍を脱して、別韻を組成するに至れり。殘餘の者は次第にオの聲よりイの聲に移り行きたるものゝ如し。

阮籍、大人先生傳、友、海、始押韻。周代の古韻にては友はオ、海はコ、始はソの格なり。

然るに魏の時代にては友は既に其音を轉じて他に移れり。従つて海も始も最早原音にては非ずして、三字或は落着かざる混聲押韻なりしなるべし。

同、詠懷詩、臺、哉、萊、埃、灰押韻。灰は別韻の字にして、此時代の音を寫せば、タエの假名なるべし。他の四字も此字と押すに至りては、テ、セ、レ、エと變はり來れるものな

るべし。

陸機挽歌、茲基、旗闌、詩、時、輻、期、來、騏、臺、知、時、思、能、離、押韻。是れいはゆる過渡時代の押韻にして、混聲なりしが如し。イの聲多數を占め居れるに似たれど、他韻より雜はり入れる闌、知、離は此時代にてはエの聲なり。來、臺、能もエの聲なるべし。是れ此諸字の其原音のオ、イを離れて、他音に移らんとする傾向を示し居りたることと見做すべし。

同、文、賦、紀、止、起、理、擬、耳、押韻。同聲の押韻にして、イの聲と爲りたるものなるべし。潘岳射雉賦、才、媒、來、鰲、同、西、征、賦、海、宰、殆、在、押韻。エの聲の獨立韻を組成したるを示す。

右のエの聲の者、後アイの聲に移れど、中には願のエよりイ、備のべよりビと爲りたるが如く、イの方に轉じたるもあり。

第二、衣、依、哀、愛、隈、惠、回、氣、祁、既、希、慨、開、階、凱、鯁、齊、濟、西、栖、氏、低、弟、尼、泥、禰、俳、陞、米、迷、謎、尾、未、妹、彌、戾、梨、禮の類は、先秦音のオ、エの聲より轉じ來れる漢魏音なり。漢の古詩十九首の中なる齊、階、悲、妻、徊、哀、稀、飛の押韻、魏文帝寡婦賦の淒、徊、頽、乖、迴、栖、懷の押韻の示せるが如し。左に曹植、七哀詩を引いて細説を試むべし。

假名に現はれたる時代音

明月照江樓。流光正徘徊。上有愁思婦。悲歎有餘哀。借問歎者誰。言是蕩子妻。君行踰十年。孤妾常獨棲。君若清路塵。妾若濁水泥。浮沈各異勢。會合何時諧。願爲西南風。長逝入君懷。君懷良不開。賤妾當何依。

今韻にては徊。哀は灰の韻。妻。棲。泥は齊の韻。諧。懷は佳の韻。依は微の韻にて四韻相押せる異觀あり。説く者は曰ふ。古韻は廣く通韻を許すと。是れ通韻に非ずして、當時の本韻なりしを忘るべからず。我假字音に従へば徊はエ。哀はエ。妻。棲はセ。泥はネ。諧はケ。懷はエ。依はエにして、エの聲を通じて一韻を爲せるを見るべし。遠く漢魏の昔に於いて、我と彼との間に、往來の道の開け居りたることを疑ふべからず。

六朝の初期の頃より、上記の者の中より、エの聲を延ばして、エイの聲に近づける惠齊、齊、荆西氏低弟、陞米、迷謎、戾、梨、禮等と、アイの聲に近づける哀、愛、隈回、慨、開階、凱、皚、俳等との二類分れ出で、別韻を成せり。他はイの聲に移り行けり。

第三、畫^エ奚^ケ鷄^ケ谿^グ寬^グ是^ゼ帝^デ諦^デ堤^デ提^デ題^デ轉^ヘ贅^ベ買^イ賣^メ等は先秦音のヤの聲より移れる漢魏音なり尙外に圭の類、支の類、知の類、麗の類の如く、是に屬する者多けれど、其古音は假名にて寫せる例少し。晉宋の頃に至り、其聲のエイに延びたる者ありて、多數の者分れ

て別韻を組成せり。其後アイの聲の者は是れより分れ出でたり。

第四、先秦音はアの聲にして、後漢の初期より始まりて、次第にエの聲に移り、後世に至りては悉くイの聲と爲りたる者の類あり。我方にて移を彌移居のヤに寫し、宜を須宜波良のガに寫したるは、周代音を承けたる古音なり。惜しむらくは此類の古音を傳へたる者其數至つて少し。エの聲なるべしと思はるゝ漢魏音に對する假名の例も、亦多からず。宜をゲに施をセに作るは其代表音なり。奇の類、義の類、池の類、皮の類、離の類は、當然之に屬すべき者なり。

第五、曳、叡、衛、穢、會、計、介、偈、世、勢、制、筮、噬、沛、例も亦漢魏音なるべし。晋時代の詩歌を見るに、穢、會、介、沛の類と、池の類とは、別韻と爲り居れる者多し。されど魏晋の間、未だ全く韻法の固定したるには非ざりしものゝ如し。此類の變遷には、別に卑說あれど、此處には述ぶる要無し。

さて前記諸類の關係は、抄録して其大要を記すべし。

第一類のエの聲より、更にアイの聲に延びたる喉韻の類は、第二類のエの聲よりアイの聲に延びたる舌韻の類と結び、東晉、宋齊の時代に至りて、兩者全く其本籍を離れ、哈灰の韻を組成せり。

郭璞遊仙詩、廻來袁宏三國名臣序贊才、猜顏延之、陽給事誅恢、萊謝眺離夜詩臺哀。

同時に又、喉韻のイの聲の者と、舌韻のイの聲の者と相合して押韻せり。

謝靈運述祖德詩、梓美同初往新安桐廬口詩、媚意劉顯發新林浦詩異次。

第二類のエイの聲に延びたる舌韻の類と、第三類のエイの聲に延びたる喉韻の類と相結び、宋齊の時代に至りて兩者全く其本籍を離れ、齊の韻を組成せり。

顏延之、和謝監靈運詩、迷棲閨、睽靈、乖蹊、荑稽、泥淮、葵畦、偕悽、珪懷、靈は第一類より移る、乖淮、偕懷は未だ分離せず、謝眺遊敬亭山詩、齊棲溪、低啼、淒蹊、迷梯、睽。

右の中より出で、アイの聲に轉じたる者、六朝の末期に於いて佳皆の韻を組成せり。

江總、望徐祭酒詩、齋、靈階、懷乖、儕、庾信、山齋詩、齋、階、埋、槐、乖。

第三類のエの聲ある者を中心とし、之に第二類と第四類のエの聲ある者とを合はせて、後の支の韻と爲るべき者の原韻を組成したるは、後漢の中期に於いて既に見る所なり。

張衡、西京賦、馳伎、彌卑、同、南都賦、池涯、裔、醫、螭。今左に漢の古詩十九首の中の一を擧げ、代表の押韻として細説すべし。

客從遠方來、遺我一端綺、相去萬餘里、故人心尙爾、文彩雙鴛鴦、裁爲合歡被、着以長相思、緣以結不解、以膠投漆中、誰能分離此。

奇の古音は可の聲に従ひてカなり。綺の古音も亦同じ。後漢音はカとキとの中間なるケの音なるべきこと疑無し。爾は萬葉集にネの音に用ゐられたる例あり。被は波坡にハの音あるが如く、其古音はハなるべし。其後漢音はハとヒとの中間なるへの音と定むべし。さすれば前の綺のケと共に、同韻に屬する施のセなるに叶ふ。解はゲの音なり。此はセの音なるべし。此字を聲として、毗の音セイの出づるを以て、之を察すべし。然るときは、全韻ケ、ネ、ヘ、ゲ、セを通じてエの聲と爲り、能く韻法に叶ふ。亦以て我と彼と後漢時代に交通ありたる證と爲るべし。漢の古詩十九首は、其作詩の年代に就いて、古來諸說あれど、前記の詩は後漢の中期以後の作なるべきこと疑無し。

第二類は舌韻、第三類は喉韻、第四類は舌韻なれど、既に混合韻と爲れる以上は後漢時代には、其別失はれて、其の何れかに歸し居りたるものなるべし。

以上別類に屬したる諸字に對して、同音の假名を用ゐたる例多けれど、其は決して正確なる記法に非ず。其類異なれば、其所屬の字の原音の異なり居りたるべきは勿

論なるべし。

我方にては唯近似音を取りて、借り用ゐたるまでにて、細微なる別は、素より之を寫すこと能はざりしことなるべし。臚氣ながらも母音を以て韻に擬すれば、大體の上より時代を察し得べし。子音に至りては、廣く唇、牙、喉、舌、齒の五音を窺ひ得るのみにて、其細別は知ること能はず。彼方にては、時代音に緩みありたるものと見え、前に示したるが如く、喉韻と舌韻と合して、同韻を組成したる例あるを見るなり。

諸類の原音の異なり居りたるべきは、今更言ふまでもなく、第一類のエの聲の者は、第三類、第四類、第五類のエの聲の者に通ふこと少し。又第一類のアイの聲に寫したる者は、第五類のアイの聲ある者とは、其性質同じからず、第二類、第三類のエイ、アイの聲も、第五類のエイ、アイの聲の者とは縁故遠かりしが如し。尤も其間に通韻として往來したる例は無きにしも非ず。

前陳の如く我假名にては、漢字の原音を寫すことの不完全なるは、到底免れ得べき所に非ず。されど不完全ながらも我古代の假字音を以て、前例に擧げたるが如く、之を漢魏の韻法に擬すれば、其押韻を解し得べく、因つて我方の假名に現はれたる字音は、漢魏音の面影を留め得たるものと見做して、差支無かるべし。證例に擧げたる諸

種の短音の方は、後世に至りてイの聲に轉じ、我假名も亦此音を寫したる者多し。是れ後世の傳來音なるが、其假字音のみより推しては、時代々々の別は、容易く判じ難し。隋唐の時代に至りても、尙支脂之微四韻の分別あるを見れば、その各自變遷の迹同じからざりしを知るべし。

オの聲を基とする韻に四種あり。第一はオイ、第二はオウ、第三はオ、第四はオーなりしが如し。其四類の複雑なる變化に就いて、其説明は拙著「支那古韻史」の「古韻の變遷」に譲り、此處には唯假名に現はれたる漢魏音の争ふべからざる者を抜きて、四類通韻の數例を出だし置くべし。我假名にては四類別無くオの聲なり。

魏武帝、碣石篇、樹木叢生、百草豐茂、秋風蕭颯、洪波湧起、

茂の音モ、起の音己の聲に従ひてコ。

徐幹、室思詩、寄聲雖在遠、豈忘君須臾、既厚不爲薄、想君時見思。臾の音はユに非ずしてヨなるべし。思の音は同類の者の聲に従つてソと爲るべし。

蔡邕、筆賦、削文竹以爲管、加漆紙以纏束、形調搏以直端、染玄墨以定色。束の音ソク、色の音シヨク。

阮籍、詠懷詩、昔年十四五、志尙存詩書、被褐懷珠玉、顏閔相與期。書の音シヨ、期の音ゾ。

嵇康、雜詩、下逮謠俗、蔡氏五曲^三、王昭楚妃、千里別鶴^二。曲の音キヨク、鶴の音クヲク、此字クヲクと爲るは後世の音なり、

班固、幽通賦、巨滔天而泯夏兮、考遺慙以行謠^二、終保己而貽則兮、里上之所廬^四。謠は遙の假名のヨに従ふ、廬はロ。

徐幹、齊都賦、栞梗林、燎圃草、驅禽翼獸、十年惟旅^四。同韻の保にホの音あるに従ひて、草はソ、旅はリヨ。

馬融、廣成頌、面據衡陰、箕背王屋^三、浸以波漾、演以榮洛^四。屋はオク、洛の古音はロク。魏文帝、登城賦、駕言東道、陟彼城樓^二、逍遙遠望、乃欣乃娛^四。樓はロ、娛はゴ。

右諸例の中には、古音の假名に見えざる者は、其類を押して、音を定め置けり。入聲は此時代には未だ有尾韻に移り居らざりしも、判明し易きため尾音にクを附せり。

右の假字音は、漢魏音の面影を留めたる者なり。諸類其後の變化に至りては、多岐に分れ、我方の假名のみを目標として、輕々しく見解を下すこと能はず。上に挙げたるが如き押韻法は、晋の時代に入りては、其例を見ること稀なりとす。

安、鞅をア、汗、甲をカ、散、相をサ、丹、當をタ、難、南をナ、半、芳をハ、萬、末をマ、楊をヤ、良、樂をラ、漣、王をツ、印をイ、吉をキ、信をシ、陳をチ、仁をニ、賓をヒ、民をミ、隣をリ、雲をウ、君をク、寸をス、

農。をヌ。延。をエ。結。をケ。天。をテ。年。をネ。辨。をベ。面。をメ。連。をレ。隱。をオ。興。をコ。宗。をソ。登。をト。能。をノ。本。をホ。蒙。をモ。用。をヨ。稜。をロ。遠。をヲ。に作るが如く、有尾韻の字を、略音として用ゐたる例あれど、無尾韻の字に比すれば、其數も多からず、又其上漢魏音の特徴を現はす者も少ければ、取り立てゝ證例に用ゐざることゝせり。

假名のみを辿り行きては、六朝音は捕促し難かるべし、却て先に彼方の韻の變遷を探り、之を我音に照らして考へ合はせ、兩者の調和を立脚として、時代を定むること、安全なるべし。後世の東、冬、鍾、魚、模、虞、侯、尤の諸韻に入る者にして、古音のオの聲より發して、ツの聲に移り、時には兩者並び行はれ、又更に再び相分れたる形迹あるが如きは、細密の注意を用ゐるに非ざれば、時代音の變化を探り難かるべし。

遠。越。をヲ。煩。をボ。の假名に用ゐたるが如き例あるは、明かに宋齊以後の南音に由りたるものなり。

杲。をカ。の音。草。をサ。の音に用ゐたるが如き例あるは、漢魏音の高をコ、刀をト、保をホの音に用ゐたる例に合はず。六朝音は、猶漢魏音を繼承し居りたるものゝ如し。故にオの聲をアの聲に轉せしめて、寫したるは、隋唐音なるべし。

都。の古音のツをトに改め、又圖。の古音のヅを殊に濁を清に變へて、トに作りたるが

如きは、新來の隋唐音に據りたる書紀音なり。

麻。をバ。彌。をビ。矛。をブ。娜。をダ。尼。をヂ。泥。をデ。に作り、伽。をカ。祇。をキ。衢。をク。祁。をケ。渠。をコ。時。をシ。齊。をセ。贈。をソ。池。をチ。屠。をツ。徒。をト。鱗。をハ。被。をヒ。浮。をフ。弊。をヘ。朋。をホ。と爲し、韻鏡の清濁の m と n とを濁に、又濁を清に寫したるは、いはゆる我漢音の特徴にして、書紀に見えたる新來音なり。此音唐韻と一致せず、梵漢對譯とも同じからず、入唐僧の傳來音とも異なれるが如し。此音隋唐の北音より來りたる可きは疑無きも、洛陽長安の音ならざりしとせば、其原音は北地何れの處の音なるべかりしか、尙大いに穿鑿の餘地を留む。古事記音には隋唐音なるべしと思はるゝ者も散見すれど、其中に見えたる清と濁との別は、概して唐韻、韻鏡と能く相叶ふ。

方。をホ。忘。をモ。に借りたるは漢魏音なり、六朝の南音も同系の音なりしが如し。然るに同類所屬の者にして、鞅。をア。舛。をザ。當。をタ。芳。をハ。楊。をヤ。良。をラ。王。をワ。に借りたるが如き例遙かに多數を占む。是れ疑も無く隋唐音に則りたるものなるべし。

ナラに寧樂を當て、寧をナと讀むのは古音なり。ヘグリに平郡を當て、平をへに用ゐたるは新音なり。下の方は隋唐音に據りたるものなるべし。和名抄の地名などに見ゆる假名には、唐代の新音と思はるゝ者多し。尙後世には傾城をケイセイ、風情をフゼイと言ふが如く、特に新音を傳へたる者あり。